

グローバル化された世界における大域的所得分布の不平等・貧困度計測

岡山大学 吉田 建夫

グローバリゼーションの進展に伴って、世界を一体的に理解する必要性は今日ますます高まってきている。本報告の目的は、世界各国から得られる国内一人当たり所得・人口・国内所得分布の3種類のデータを全て用いて、世界全体を対象とした大きな「世界的所得分布」(図1)を継続的に作成し、世界全体としてどの程度大きな所得不平等及び貧困度が存在し、それがどのように変動してきたのかを、可能な限り最新のデータを用いて明らかにすることである。

より具体的には、次の二つの統計資料に依拠した計測結果を報告する。

(1) 各国の一人当たり実質所得及び人口データ：世界銀行が主導し調整した2011年国際比較プログラム(ICP)の成果を反映した世界銀行の世界開発指標2015年版を用いる。各国の一人当たり所得は、2011年国際ドル表示の購買力平価に基づく一人当たりGDP及びHFCE(Household Final Consumption Expenditure)に依拠している。

(2) 各国の国内所得分布データ：本報告では、Soltにより新しく編集されたSWIID(Standardized World Income Inequality Database)Ver4.1(2014年3月版)に依拠した計測を行っている。同データベースは、World Income Inequality Database(国連大学世界開発経済研究所 UNU-WIDER)とLIS(Luxembourg Income Study)に基づき、長期にわたる所得分配の国際比較可能性の最大化を目的として再構成された網羅的な資料であり、1960年以降の世界174国にわたる所得分布の不平等度がジニ係数の形にまとめられている。

問題は、上記3種類の情報からいかにして世界的所得分布を復元するかである。本報告では、妥当な仮定として、各国の所得分布は対数正規分布に従うとする仮定をおいている。所得分布が対数正規分布に従えば、ジニ係数は所得の対数分散の関数として表される。したがって、世界各国についてジニ係数と一人当たり所得の情報が与えられれば、各国の累積所得分布関数が一意に定まるから、これらを人口比でウェイトをとって、集計することにより、世界全体の大域的所得分布の累積密度関数を求めることができる。

当日は、時間が許す範囲内で可能な限り詳細な計測結果の報告を目指したい。

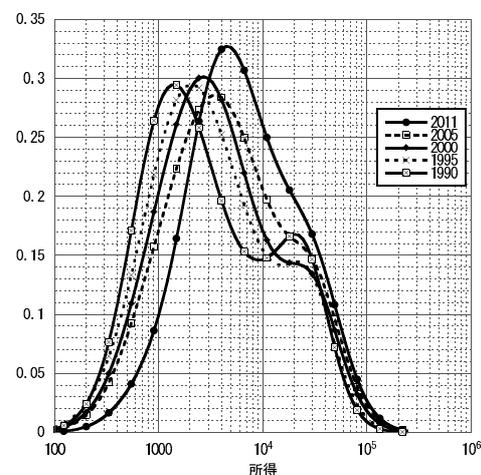


図1 世界的所得分布の推移